

沈黙の 260 年 禁教下で信仰を密かに守り続けた潜伏キリシタン

潜伏キリシタンとは

潜伏キリシタンとは、キリスト教が禁じられていた 1614 年から約 2 世紀半の間、ひそかに信仰を守りつづけた信徒の呼び名です。大村藩が推進した移住政策の結果、18 世紀末までにキリシタンは外海地区から五島列島や黒島などの離島部へ移住し、そこで潜伏キリシタン集落を形成しました。禁教時代を耐え抜いて信仰を維持し継承し続けたキリシタンは、九州西部を中心におよそ 3 万人存在していたと推定されています。

信仰組織の形成と継承の背景

まだ信徒の数が増え続けていた禁教前、宣教師たちは布教に必要な宣教師の人数が不足していることを認識していました。彼らは、数名の日本人を信仰指導者として選び、キリスト教を自らの力で信仰し続けていくことが可能な組織をつくりました。この信仰組織には医療や救貧等の活動を行う「慈悲の組（ミゼリコルディア）」信徒たちの信仰の維持と強化のための「信心会（コンフリリア）」がありました。宣教師不在の中で、潜伏キリシタンの信仰を支えたこれらの組織の存在は非常に重要でした。潜伏キリシタンは、祈りとキリシタン暦を司る「帳方」、洗礼を授ける「水方」、伝道を行った「聞役」と称される指導者たちの下で、ひそかに祈り、信仰儀礼を行いました。